



協会ニュース

第114号



一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田1-6-3 フェリオ西早稲田301号  
〒169-0051 TEL:03-3204-0595 (FAX兼用)  
E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp URL:<https://nitteikyou.org>  
発行者:会長 高橋 康夫  
編集者:広報委員長 小沼 康子  
題字:上原 敬二  
発行日:2023(令和5)年10月15日



## 国指定名勝 貞観園

かんだ まつたろう  
**神田 松太郎**



石燈籠と飛石、苔で構成された「南宛」は、崖下を流れる鯖石川対岸の城山を借景とする広がりと奥行きのある佇まい。2023.10.10 筆者撮影

新潟県柏崎市岡野町にある貞観園は、庄屋の居宅である貞観堂を中心とした池泉回遊式庭園です。この地域は積雪が多く、自然落下した雪が軒先まで積もり、それを排除した雪がまた積み重なり高さ七尺位（約2m）の石灯籠が隠れてしまいます。

貞観堂の修復工事を行うことになり、技術指導の庭園部門に

56年頃5名の同じ造園業仲間で、同好会「庭研一の新潟」をつくり、技術の向上を目指して活動。さらに広く向上するため、仲間の修行先の小形研三氏に相談したところ、うつつけの人物がいると紹介をしていただいたのが龍居竹之介先生でした。その後、新潟県支部を立ち上げ、伝統庭園技塾の初の地方開催になりました。

1950年生まれ。新潟県新潟市南区出身。1981(昭和

56)年頃5名の同じ造園業仲間で、同好会「庭研一の新潟」をつくり、技術の向上を目指して活動。さらに広く向上する

ために仲間の修行先の小形研三氏に相談したところ、うつつけの人物がいると紹介をしていただいたのが龍居竹之介先生でした。その後、新潟県支部を立ち上げ、伝統庭園技塾の初の地方開催になりました。

は本部から龍居竹之介・柴田正文、新潟県支部から後藤剛助（当時・支部長）・石川治壱・筆者、建築部門には望月敬生など庭園協会本部及び新潟県支部会員等が多く関わりました。

2005(平成17)年に解体前の実測調査を当支部会員・田中

泰阿彌研究会会員合同で行いました。同年に建物解体前に支障に

なる蹲踞・飛石・軒内の石貼り等の撤去を実施、それに伴う素材の寸法・番号付け・記録などを併せて行いました。この時初めて文化財の解体の知識を少しは得たと思つております。その後、2

008(平成20)年に復元工事を当協会会員の方々に協力いただき、完成にこぎつけました。

2010(平成22)年より2014(平成26)年までの5カ年にわたり、貞観園内の茶室、抱月楼・月華亭・環翠軒修復工事の実施に伴う工事と修復周辺の庭園の経年劣化による傷みの修復を継続しました。この工事は庭園に関しては新潟県支部、建物に関しては(有)歴史建築設計研究体(代表望月敬生)が設計監理を行いました。

2015(平成27)年から2019(令和元)年にかけて貞観園の前の道路の向かいにある貞観園内苑(円角庵・玄隆斎・内苑庭園)の保存修理工事を5カ年にわたり継続事業としました。前回同様、庭園は新潟県支部、建物に関しては(有)歴史建築設計研究体(代表望月敬生・望月敬士)が設計監理を行いました。

2004年から13年間、修復工事に関わらせていただきました。龍居先生と貞観園当主・村山義朗様の繋がりで当支部に修復工事の仰せがあったのは、支部会員の人脈の良さだと思つております。修復前の貞観園の庭は自然体の庭という考え方で管理されており、自然に芽生えた樹木や大きく成長した低木等が景観を阻害していましたが、徐々に改善しております。

年2回、低木剪定をしており、ドウダンツツジなどのツツジ類は刈込鋏を使用せず木鋏だけで透かし剪定をしています。当主の村山様のご理解と思っております。

(正会員)

(当協会会員は敬称略とさせていただきました)

# 長尾欽弥とよね～その人物と本宅・別荘の庭園をめぐつて～その2

2022年12月24日 緑と水の市民カレッジ

加藤 映  
かとう えい

引き続き、長尾欽弥の別荘、鎌倉山扇湖山荘と唐崎隣松園の庭園について、それぞれの庭園の構成と配置、訪問者のエピソード、そして長尾資料館所蔵の写真を中心に庭園の様子を紹介します。

まず、鎌倉山扇湖山荘です。

## 別荘 鎌倉山扇湖山荘の構成と配置

扇湖山荘は1931（昭和6年）に着工され、1934（昭和9年）年に完成しました。鎌倉山の頂上部に位置し、敷地は周囲の山々を含め約

13万坪です。設計は大江新太郎、作庭は7代目小川治兵衛とその甥の岩城亘太郎です。現在は山頂部の主屋とその周囲の庭園だけが残っています。

長尾よねの没後、大林組が所有し、一時期料亭「鎌倉園」として営業ましたが、まもなく閉店。19

81（昭和56）年に三和銀行が取得し、三菱銀行に引き継がれました。2010（平成22）年に三菱銀行から鎌倉市に寄贈されました。

鎌倉駅の西方に位置する鎌倉大仏を過ぎるとトンネルがあり、そこを過ぎると笛田というところに出ます。そこから左の方に折れて鎌倉山に登る道があります。この辺り一帯が鎌倉山で、そのちょうど東南の端辺りが扇湖山荘のあつたところです。

現在の等高線図（図1）を見ると、頂上部分に主屋、その周辺に庭園、そして主屋の北の山の上に伏見亭があります。西側も山になつていて、東側と南側は急な谷になつています。およそ20mの高低差があるかと

当初は扇湖山荘の麓の南と北の谷戸には大きな池を配した庭園がありました。ともに立派な茶室を備え、両方の庭はトンネルで結ばれています。この2つの庭は長尾家が資金に窮した1960（昭和35）年ごろに周囲の山とともに売却され、住宅地として開発されました。

1946（昭和21年）の扇湖山荘の航空写真（図2）を見ると前庭と裏庭が写っています。現在は宅地になつています。

長尾家について一緒に調べてきました土居隆氏は、この近くの鎌倉市極楽寺というところに生まれ、鎌倉山の上方にある幼稚園に通っていましたそうです。子どもの足で山をぐるりと回ると大変なので、長尾家に相談して、敷地内の庭を上つて幼稚園

に通っていたそうです。この庭は子どもたちの遊び場になつていたそうです。子どもながら神秘的で素晴らしいと感じたと話していました。土居氏の美意識は扇湖山荘の庭から与えられたと今でも言っています。前庭と裏庭を繋ぐトンネルは扇湖山荘

1955（昭和30）年  
8月14日、山形県鶴岡市にて出生。4歳時に家族と共に横浜に移り住む。男四人兄弟の三男。昭和56年横浜市立大学医学部卒業後、麻酔科医としての勤務を経て平成15年横浜市瀬谷区に「かとうクリニック」開院（令和3年閉院）。趣味はマラソン、釣り、読書、音楽（コントラバス）等。現在は仕事から離れ、長尾家のことと父の実家である加藤忠廣から繋がる山形県酒田市新堀の加藤家について調査。ウェブサイト「長尾資料館」とウェブサイト「身似明星」に公開。長尾家の書簡を読むことがきっかけとなり、今は崩し字解説に嵌まっている。



図2 1946年(昭和21年)頃の扇湖山荘 国土地理院空中写真閲覧サービスの図に筆者追記

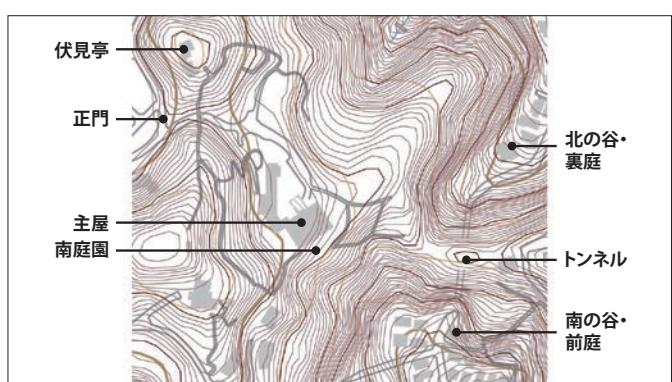


図1 現在の扇湖山荘 等高線図(1.0m)  
地理院タイル(標高タイル)を「Web等高線メーカー」サイトで作成したものに筆者追記

ができる前からあり、今も地元の人達が便利に使っています。

## 扇湖山荘の訪問者・半泥子と魯山人

さて、この扇湖山荘にも多くの人が招待され、宴会が催されました。また、長尾美術館所蔵の「仁清の壺」<sup>(註1)</sup>を見に訪れた人も多くいました。その一人が川喜田半泥子です。半泥子は陶芸家としても知られ、欽弥の所属していた「延命会」という茶の湯の会の一員でもありました。

それまで「仁清」をあまり評価しないなかった半泥子は欽弥に頼んで、1937（昭和12）年2月、扇湖山荘を訪れ、「仁清の壺」を見分しました。この壺を見て仁清に対する認識を新たにしたということです。この時の様子は、半泥子が書いた『隨筆泥仏堂日録』<sup>(註2)</sup>に非常に詳しく書かれています。

大船からタクシーで扇湖山荘に向かい、着くとまず庭を案内されました。それから地下の美術品を見て、次に食事やお酒のもてなしを受け、かなり酔つてしまつた後に「仁清の壺」が出てきたといった話が書かれています。

後日、半泥子はその日の礼状を欽弥に送つており、長尾資料館で保管する書簡の中に残っています。

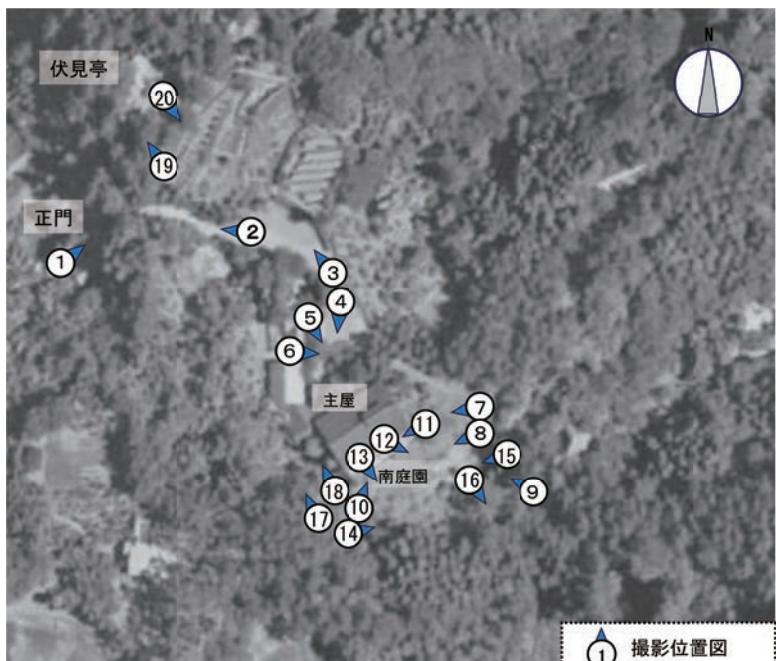
この時、よねは半泥子を迎えるために、料理を盛る器を一日がかりで選び、支援していた北大路魯山人を呼びその手料理でもてなしました。

当時、星ヶ岡茶寮を追放になり窮地に立たされていた魯山人を救つたのが長尾家でした。欽弥は魯山人を連れて、瀬戸古窯発掘の旅に出ています。「わかもと」のノベルティを依頼され、大量に焼き物を焼くことで魯山人は次第に元気を取り戻したそうです。

見るからに気難しそうで近寄りがたい雰囲気の魯山人ですが、宜雨莊での宴会でのことです。よねの隣に魯山人が座り、2人が話をしていたところ、急によねが魯山人の頬をぴしゃりと打つたそうです。魯山人は母親に叱られた子供のようにしゅんとしていたそうです。目撃したのは宜雨莊でも登場した村田五郎です。当時の魯山人にそんなことができたのは長尾の奥さんだけだろうと手記<sup>(註3)</sup>には書かれています。東の魯山人、西の半泥子と並び称された2人ですが、西の半泥子が仁清の壺を見に扇湖山荘を訪れたとき東の魯山人が自らの手料理でもてなしたという話です。また、それを演出したのが長尾よねでした。

# 写真で見る扇湖山荘

## 撮影位置図



### 特記以外

- ※1 1953年3月撮影(カラースライド)
- ※2 1955年4月15日撮影(カラースライド)
- ※3 撮影年不明(モノクロスライド)
- 撮影者は不明だが、おそらく長尾欽弥と思われるすべて長尾資料館蔵



①近年の正門です。門を入ると左側(西)と正面(北)に山があります。その間が切り通しになつていて、上に橋が架かっています。左方向に行くと伏見亭(茶室)、右の山道を行くと南庭園へと下つて行きます。(近年 土居隆氏撮影)



②門を入ると砂利道になつていて主屋に向かいます。右上に伏見亭が見えます。(※2)

## 主屋



⑦仕切り門を下りると南庭園にでます。主屋は木造2階建て、地下は鉄筋コンクリート造りで、この上に主屋がのっています。上部構造物は、飛騨高山の民家を移築したもので。2階の手前側はホールになっていて、ビリヤード台が置いてあった記憶があります。その奥に欽弥とよねの寝室がありました。地下は美術品の収集倉庫で、戦後長尾美術館として公開されたところです。(※2)

## ベランダ



⑩主屋の南面にはベランダがあります。(※2)



⑪かなり広いベランダです。正面の門の先は山道で、正門からみえた橋に続いています。(※1)

## 正門・アプローチ(続き)



③さらに先へと進む砂利道です。中央右手は梅林です。(※1)

## 玄関まわり



④主屋の玄関。車寄せです。私が住んでいた頃は、ちょうど私が車の免許を取得中で、ここの中庭で運転の練習をしました。(※1)



⑤主屋玄関の正面です。東側(左)に仕切り門があり、そこを下りると主屋周りの庭園へ繋がっています。(※2)



⑥主屋の東側(右)には仕切り門があり、そこを下りると主屋周りの庭園と繋がっています。(※2)

## 主屋の西側



⑯主屋西側と山の間の茶庭です。この辺に欽弥の書斎があつて、茶室のような部屋があつたと思います。(※2)



⑰主屋の西面です。この辺りには風呂場があったのですが、住んでいた当時の管理者に聞くと、暖房システムの関係で風呂を沸かすのに1日何万円もかかると言われました。(※2)

## ベランダ(続き)



⑫ベランダから東方向を見ています。  
(※1)



⑬南に目を向けると奥方向に相模湾が見えます。海が扇形に見えるこの景色が「扇湖山荘」の名の由来となりました。村田五郎によると、近衛文麿の命名のことです。(※1)

## 伏見亭



⑯伏見亭です。現存しています。鎌倉市が時々一般公開しています。(※3)



⑰伏見亭からの眺望です。ここからも扇状の相模湾が望めます。(※3)

## 伸秋亭



⑯南庭園から前庭へ下る道です。この茅葺の建物の詳細ですが、「伸秋亭」と思われます。長尾家の茶の湯の世話をした鈴木宗保は、田中光頼が扇湖山荘を訪れたときに、田舎家風の茶室でお茶を点てたと書いています。その田舎家風の茶室というのがこの建物だと思われます。現在はありません。(※2)

## 南庭園



⑭主屋南側の南庭園です。右側はかなり急斜面になっています。かつては斜面の下に前庭がありました。(※2)



⑮南庭園の反対方向を見たところです。主屋の前は芝生になっています。(※2)

次に隣松園の話をしましょう。

## 別荘 唐崎隣松園の構成と配置

隣松園は1932（昭和7）年の着工です。完成目前の1934（昭和9年）9月、室戸台風で一部倒壊したそうですが、同年の暮れに完成了。

琵琶湖の湖畔唐崎に位置し、敷地は約1万4千坪であったと思われます。関西方面の要人や外国からの訪問使節の接待に利用され、接待の多くは庭園で行われました。

建築は3代目木村清兵衛（註4）他で、造園は7代目小川治兵衛とその甥岩城亘太郎です。戦後、裏千家に売却され、後に大津市に寄贈されました。が、2006（平成18）年ごろに解体され、跡地は住宅地として開発されました。

現在の等高線図（図3）を見ても明らかのように湖畔の平らな地形を利用していました。本宅宜雨莊は沢を利用して庭園がつくられ、借景を求めることができなかつたため、敷地内で完結する自足的な庭園がつくれられ、鎌倉山扇湖山莊は山の上部に遠景を取り込む借景の庭園をつくりました。

この隣松園は琵琶湖のほどりにあ

り、敷地の外への広がりのある庭園がつくられたということになります。

隣松園の構成と配置については矢ヶ崎善太郎の茶室研究の論文（註5）に記載があります。その内容を解体前の航空写真（図4）に当てはめてみます。

まず建造物としては主屋、茶室3棟と腰掛待合2棟、ボートハウスのほか、付属屋数棟がありました。

主屋は敷地のほぼ中央部、南東前

面の芝生の広い庭を介して琵琶湖に面しています。この主屋は田舎家風の建物がいくつか連なっていました。

茶室①は、主屋の西方、湖岸に近いところに、その北側、竹林の中に茶室②が、主屋の北東の林の中に茶室③が建っていました。

そして、主屋の南東方向の琵琶湖畔にボートハウスが建っていました。本宅宜雨莊に比べるとシンプルでわかりやすい構成です。

### 隣松園の来訪者・東久邇宮稔彦王、 大津航空隊慰問会と外国の団体客

この隣松園は特別な来賓のもとでなにモーターボートが使われました。モーターボートは全長が約10m、幅は約3mで、船体はクリーム色に、喫水以下は赤の船底塗料が塗られていました。建造は神戸川崎造船所で、進水は1833（昭和8）年です。戦前の我が国ではこのような個人用モーターボートはほとんど存在せず、航行時は人々の目を引きつけたものと考えられます。図5には、日の丸が写っています。特別な人が来たときの写真でしょう。宜雨莊にも訪れたことのある東久邇宮稔彦王の来訪の記録があります。

1943（昭和18）年11月、大津航空隊を招いて慰問会が行われました。この時の慰問会プログラムが残っています。それによると芸人も何人かよばれていたようです。接待には裏千家の人がたくさん来て手伝ってくれたそうです。

慰問会は当初400人ほどの予定だったそうですが、結局600人から700人ぐらいの大宴会になつたそうです。というのは、当日航空隊の基地に兵の家族たちが面会に行つたところ、本人たちは「わかもど」のことろだと聞いて、家族も隣松園に駆け付けたということです。このときの報告書の中に蕎麦屋の伝票も残っていました。そこには「蕎麦800人前、120円」と書いてありました。



図4 1987年(昭和62年)頃の隣松園 国土地理院空中写真閲覧サービスの図に筆者追記



図3 現在の隣松園跡地 等高線図(0.5m)  
地理院タイル(標高タイル)を「Web等高線メーカー」サイトで作成

海外からの訪問者も多かつたようです。残されていた写真で分かるのは、1938（昭和13）年に、ヒトラーユーゲントが訪れていました。同

ル教員団体一行。この時にはボートから降りると一人一人に和傘がプレゼントされたということです。この和傘は非常に好評で、大事に持ち帰つたということです。

団体名は不明ですが、1940（昭和15）年に撮影されたことが分かっている写真も残されています。もしもすると、米国のガーデンクラブではないかと思つていきましたが、一行の訪問は1935（昭和10）年5月15日の記録がありますので、別の団体だったようです。

このように、広い芝生のある隣松園では大人数の接待に使われたといふことになります。



図5 特別な来賓のもてなしにはモーターボートが使われた  
(撮影年、撮影者不明)

# 写真で見る隣松園

## 正門・アプローチ・玄関



①これが正門です。



②主屋の玄関です。特徴的な屋根が連なっています。

## 撮影ポイント



特記以外はすべて1952年秋撮影(カラースライド)  
撮影者は不明だが、おそらく長尾欽弥かと思われる  
すべて長尾資料館蔵

## 主屋と庭園



③主屋南面です。琵琶湖側に開放的な芝生が広がっています。後ろに見えるのが比叡山だと思います。



④母屋の北西側から琵琶湖を望んだ景色です。最も隣松園らしい一葉だと思います。琵琶湖の湖面、遠くに鈴鹿山脈の山並み、これらを背景として、手前に広い芝生とマツ木立が絶妙に配置されています。

## 茶室①



⑫上棟幣軸には数寄屋師木村清兵衛の名があったと聞いています。(註4)

## ポートハウス



⑬左奥で琵琶湖に通じています。



⑭ポートハウス前の引き込みです。左側が琵琶湖です。



図6 『芒の庭の宴』のシーン 写真④右奥の樹木と同一（「雨月物語」DVDより）

## 主屋と庭園（続き）



⑧主屋の南西の角あたりです。



⑨主屋の南面です。



⑩庭園の東側です。



⑤庭園の南西側。中央に見える橋の先に行くと茶室②があります。川はここをずっと琵琶湖の方に流れています。



⑥広がる芝生の先に琵琶湖の湖面、その奥に山々が連なっています。



⑦主屋の西面です。マツの木立が琵琶湖に向かって連なっています。この付近で接待や宴会が行われたようです。

## 小川



⑪庭園の南端、琵琶湖へと流れ出る川です。

さて、解体された隣松園ですが、実は二つの映画の中で、その姿の一部を残すことになりました。一つは世界的にも評価の高い「雨月物語」です。1953（昭和28）年の公開で、監督は溝口健二です。溝口本人が直接欽弥に使わせてほしいと依頼したそうです。

図6は芒の庭の宴のシーンです。

正面の樹木は先述④の右奥に見える樹木のように見えます。

もう一つは「利休」です。野上彌生子原作、勅使河原宏監督、三國連太郎が利休を、山崎勉が秀吉を演じた1989（平成元）年公開の映画です。このときは既に裏千家所有となっていました。

この庭のシーン（図7）の他、主屋や茶室なども何シーンか登場していました。

長尾欽弥とよねのまさに夢の宴と



図7 裏千家所有の頃の隣松園を使用 写真⑩と同アングル（「利休」DVDより）

もいうべき稀有な人生を紹介するとともに、2人がつくった3つの邸宅の庭園について、扇湖山荘に残されたカラースライドを中心に解説を試みました。お話しした内容のほとんどがホームページ「長尾資料館」に掲載されています。ご覧いただければ幸いです。（長尾資料館館長）

註1..「仁清の壺」は、江戸時代初期の陶工野々村仁清作の茶壺で、1951（昭和26）年6月9日、国宝に指定。名称は「色絵藤花文茶壺（いろえふじばなもんちやつぼ）」。

註2..川喜田半泥子『隨筆泥仏堂目録』、講談社文芸文庫、2007

註3..村田光義『海鳴り』、芦書房、2011

註4..2004（平成16）年、日本庭園研究センターにより調査が行われた。調査結果「隣松園現況調査業務報告書」によれば茶室①の上棟幣軸には「数寄屋師木村清兵衛 手伝今井清右衛門」の名がある。

註5..矢ヶ崎善太郎、『長尾欽彌別邸・隣松園の茶室について』、数寄屋師木村清兵衛の研究（2）日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、2006.5

註6..「太閤左文字」は、南北朝時代、初代左文字のもつとも代表的な作。1952（昭和27）年11月22日、国宝に指定。名称は「銘左（めいさ）／筑州住（ちくしゅうじゅう）」。

註7..大正から昭和期の刀剣学者。古刀研究の権威。本間美術館（山形県酒田市）の初代館長。

註8..大正から昭和初期にかけて活動した日本の実業家。本名は松本松蔵。書画・骨董品を蒐集。1935

長尾よねが購入し、後に国宝となつた骨董美術品を二つ紹介します。

一つ目は左文字の短刀、「太閤左文字（註6）」とも呼ばれています。本間順治（註7）の指南のもと、井上子爵家の売立会で購入しました。現在はふくやま美術館所蔵です。

二つ目は「仁清の壺」です。長

尾家の美術品の中でも逸品中の逸品です。これを見るために多くの人が長尾家を訪れたそうです。

1933（昭和8）年、松本双軒（註8）遺愛品の売立会で購入しました。この壺を競り落としたときの様子が『経済第一線（註9）』という本に書かれています。

世間的にあまり名が聞こえない一売薬屋本舗が天下の根津（註10）の向こうに立ったのみか、完全に鼻を折つて凱歌を上げて、国内無双の仁清の逸品を手に入れたので、一般好事家に君が容易なる富豪であることが認識されました。

長尾家衰退の後、「仁清の壺」はどうなつたかと、世界救世教教祖の岡田茂吉が手にいれました。

古美術収集家としても知られていた茂吉は他人の所蔵品をあまり褒めることはなく、美術館を巡つては酷評するのが常でした。長尾美術館を訪れた時のこともガラクタばかりと書いています。しかし、「仁清の壺」だけは大いに気に入つたようで絶賛しています。



色絵藤花文茶壺 仁清作 長尾美術館蔵  
（『国宝図録第一集』、文化財協会、1952より）

長尾家が傾き美術品も売却せざるを得ない状況に陥ると、この「仁清の壺」は茂吉に話が行きます。茂吉は当時係争中だった土地を売つて念願の「仁清の壺」を手に入れるのですが、既に死の床にあり、亡くなる前の3日間枕元にこの壺を置いていたそうです。

現在、「仁清の壺」は熱海のMO A美術館に所蔵されています。この美術館は、高台にあり大変景色のいいところです。下のエントランスからエスカレーターで上がっていくようになっていて、一番上に展示室があります。この展示室の最初のコーナーにこの壺が置かれています。

解説には、入手のいきさつは全く書かれていませんが、こぼれ話として心に留めてみると少しは感概があるかと思います。ぜひ一度行かれてご覧ください。この壺はともかく素晴らしい美術館だと思います。

## 第14回 庭園技術連続基礎講座

### 庭に向かう私の姿勢

第一回『愛知の庭を知ること 自分の好みの庭を知ること』

高見 紀雄

2023(令和5)年5月28日(日)オンライン

はじめに

タイトルに「愛知県の庭」を入れたのは、自分が住んでいる県や地方など身近にある庭を知ることが大事だと思うからです。

実は、これは受け売りでして、2009（平成21）年に愛知県支部が発足する際に、龍居竹之介先生（当時会長）からいただいた言葉です。その頃の僕は庭をつくりはじめて10年ぐらいで、周りばかりが気になつたのです。

龍居先生の言葉によつて、一番必要なのは、自分の立ち位置であり、自分が住んでいるところに自分がどういうふうに根を張つていくのかを知ることが重要であることに気づきました。

確かに名の知られた雑誌に取り上げられたいとか、有名になりたいとか、若いときなら当然そういう気持

ちはあると思いますが、実は、本来庭のあり方は自分の周り、自分の身近なところから少しづつ変えていくことによって、文化というものが広がっていくのだなと思ったのです。

しかし、愛知県の気候は高温多湿で、ここでは育たない樹木や植物があります。地域の風土にも目を向けて、形ばかりではなくて、この地域を知ることによって、本質的な庭のあり方を感じていきたいと思うようになりました。

今日は、まず自分がなぜ今の立ち位置にいるのかを説明して、僕がつくる庭の作風について話したいと思います。

#### 映画美術スタッフ時代

正直言うと、高校生ぐらいまで植物には全く興味がなく、どちらかと

いうと、映画に興味を持ち、映画監督になりたいという夢を抱き、東京

デ

ザイナー学院に進学しました。卒業後、名古屋市の山崎デザインとい

う会社にコピーライターとして1年

といった映画館に頻繁に通っていました。そこで「ロビンソンの庭」という映画を見て衝撃を受けました。その映画の監督である山本政志氏と交流を持ちたいと思い、その映画を上映することとなり、さらに感銘を受けました。

そのように映画に憧れていた20歳前後の頃、憧れの山本監督が粘菌学者の南方熊楠の映画を撮影すると知ったときに、どうしても山本監督につきたいと思いスタッフになりました。自分は、美術系の学校にいたことで絵が描けましたので美術監督の下につきました。それが林田裕至氏で、この出会いも私の人生にすごく影響を与えてくれました。

その映画は熊楠が生まれ育つた町、和歌山県田辺市で撮影されました。熊楠の生家をオープンセットにして、実際に熊楠が粘菌の勉強をした部屋を再現して、昼夜問わず撮影しました。

印象にるのが、雨が降る深夜に河原へ行き雑草を掘つて、それを草とい

シネマスコープやシネマテークなど

うのは移植するとすぐしおれてしまふものですから、河原で掘つたらすぐ植付けます。撮影部隊が来る朝8時頃、雨がちょうど上がり、朝露の中、植物と雨と光の映像を綺麗な舞台セットで撮影しました。その時の演出では、熊楠の生家に木を持つて実際に植えるのですが、掘つて植えて掘つて植えてを繰り返すような仕事をしていました。熊野の原生林で撮るシーンが何度もあって、実際の川の流れや石、熊野の山中などからすごい大自然を感じながら撮影をしていき、だんだんと熊野の森に魅了されていきました。

中でも一番印象的な出来事がありました。熊野の山中、台風で倒れたスギによって祠が破壊されるというオープニングシーンの撮影の時のことです。撮影用の仮設の祠を建設し、高さ30mぐらいのスギを実際に切り倒し、その木が祠を壊していくというシーンでした。ところが伐り倒した木が上手いこと祠をよけていくのです。2本伐りましたが、2本とも祠をよけて倒れるのです。プロの山師も、こんなことは絶対ないと言つていました。熊野の神が宿つてしまつたとしか思えません。これは何本伐つてもよけていくだろうといふことで、撮影はストップしました。

その当時はまだ庭のことが分かつていませんでしたが、そういう神秘的な森というか生命というか、森と自然の神秘性に触れました。その感覚は地元に戻つてからもずっと抜けませんでした。

結局、映画「熊楠-KUMAGUSU」は、資金難で中断しました。中断している間、刈谷市に戻り、もう少し植物や木を植えることを学んでおこうと地元の造園会社に入りました。撮影が再開するのを待ち焦がれていたのですが、結局撮影は再開されませんでした。そのままこの業界に入つてしましました。逆に言うと造園の魅力にだんだんと取り憑かれて、

熊野で感じた生命、森、神秘性など

の想いが、この造園の世界で生かせるのではないかと、徐々に導かれて現在に至っています。

それから約30年ぶりに映画の製作に復帰しました。山本監督から請われ、2019（令和元）年に『脳天パラダイス』で映画の世界に戻りました。エンドタイトルにも「庭師高見紀雄」として載っています。多分庭師としてエンドクレジットで載つたのは初めてだと思います。

その映画の主役はいとうせいこう

タニカルとかプランツに精通している氏でした。いとう氏は、以前からボ

内に入れていこうという動きをしていて、大変共感しました。そして、これからボタニカルのあり方にに対するイベントをやりましょうということになりました。2020（令和2）年、名古屋で、吉谷桂子氏を加えた3人で「ナチュラリストイック」についてのトークイベントを開催する予定でしたが、残念なことに新型コロナウイルス感染症の流行により中止になつてしまいました。

## 作庭・作風のルーツ

次に、どのようにして今の自分が在るのかという作風のルーツをお話しします。

一番のきっかけになつたのは2004（平成16）年に名古屋市栄の久屋大通り公園で行われた「12人の庭」というガーデンショーに参加した

## 「12人の庭」・鉄のゲート（図1）



図1 鉄のゲート ガーデンショー「12人の庭」パンフレットより

ので、「ベランダ」という名称でも有名になつているように、ベランダで植物を育てていました。ちょうど僕が会つた頃は「ルーマー（室内園芸）」と言つて、植物を室内外に入れていました。

その当時はまだ庭のことが分かつていませんでしたが、自分の好みの庭とはなんだろうということを考えて作庭しました。その時、以前から鉄の素材にすごく憧れていたことから、「鉄」が自分の中のルーツにあると気づきました。当時、アイアンアーティストの櫻森隆夫氏に出会つたことで、鉄の素材の良さや可能性にすごく刺激を受けました。そこで鉄を使って制作した庭をガーデンショ「12人の庭」で発表しました。

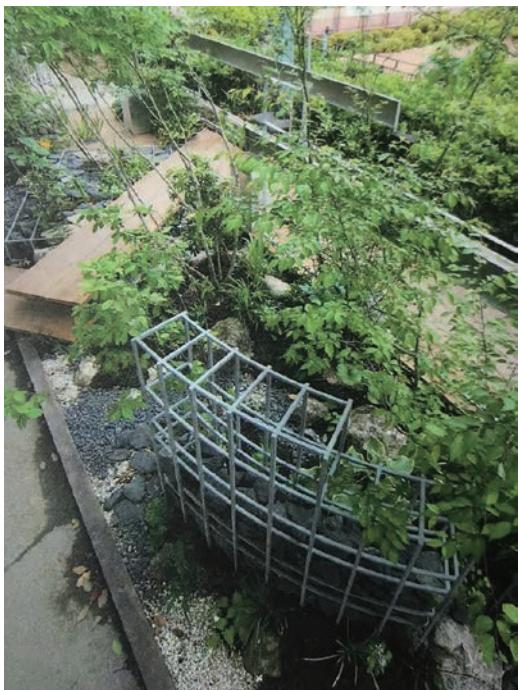


図2 格子のオブジェ ガーデンショー「12人の庭」  
パンフレットより



図3 錆鉄の門柱 2018.11.30

ます。まさに僕も子供のときに育った環境で見た原風景が自分の作風のルーツなのだろうと思ひます。

それで錆びた鉄骨とかにツル植物が巻き付いているものにすごい生命力を感じてしまいます。そういうものが心に残っていて、それを庭で表現できないかなあと思つています。それがガーデンショーで初めて発表した鉄の作品に繋がっています。

その頃、鉄の錆にも憧れています。たが、錆の作品というのはまずなくて、お客様にも錆びるものをするめることに対しても抵抗感があります。そこで、まず自邸で錆のものを試してみようと、2003（平成15）年、自分の家のポストと門柱を錆鉄でつくりました。

これはコールテン鋼を使つています。コールテン鋼は、錆びても無垢の鉄よりも少し強度が高いことがわかつっていました。そこで、コールテン鋼に「サビ-X」という錆発生促進剤を吹きかけて錆びさせていました。最初は汚い錆ですが、だんだんと赤錆から黒錆に変化していきます。黒錆まで行くと、ほとんど錆びて行かなくなります。その錆というコーティングによつて、その鉄はも

曲げ、溶接していく、すべて手作業で形づくっていきます。鉄の中に入れたグラスをはめ込んでいます。自分のデザイン画をもとにクラフト系アーティストにつくってもらいました。おそらく、このようなゲートは世の中にはないだろうと思つています。

## 格子のオブジェ（図2）

自分の個性が出たのがこの鉄の格子状のオブジェです。無垢の鉄を曲

げてアーチ状にしました。今では鉄のメッシュ状の蛇籠風のものが盛んに使われていますが、それらが海外から輸入される前に発表しています。これは、今から18年ぐらい前の作品で、当時、「ガビオン」のようなものは既に認知されており、多分こういう時代が来るだろなというのは予想していたので、先を行くためにこのような鉄の格子をつくり、それに碎石を詰めました。

当時、鉄をふんだんに使うといふのも珍しく、有機的な樹木と鉄との融合が相まって、通りがかりの人には結構好評でした。僕の庭の人生を大きく変えた庭でもあります。

鉄の格子に碎石を詰め込んだデザ

インを知つたのはスイス出身のヘルツォーク&ド・ムーロンという建築

## 錆鉄の門柱（図3）

家ユニットによるアメリカ・カリフオルニア州のドミナス・ワイナリー（1997）という建築です。僕が鉄を好むようになったのは、育つた環境にルーツがあります。僕の住む愛知県刈谷市は、トヨタ系の本社が多く、元々は紡織、基本は織機ですが、そういう工場の多い土地で、しかも僕が育つた中山町といふのは準工業地帯で周りに木材加工工場、紡績工場、製陶場や製陶場の廃材置き場があり、そういう地域の長屋で育ちました。長屋の裏に行くと鉄くずだと真空管の廃材とかが転がつていて、階段などの鉄部は錆びていたり、朽ちていたりと、そういう風景を見て育ちました。

庭の作風には幼少期に見た心象風景とか、原風景が影響するといわれ

う永久にそのまま朽ちません。本当に鋸を出すまでには、長い時間、門柱ですと1年半ぐらいかかりますが、いい鋸が出てからは触つても手に鋸がつくことはなく、朽ちていきました。この事例は、20年ほど経っていますが、ノーメンテナンスです。

### 鉄のパーゴラ（図4・5）

2005（平成17）年につくった鉄のパーゴラです（図4）。これも自分の人生を変えた庭の一つです。

2つの鉄製のパーゴラを狭い空間に向かい合って据えています。この状態で見るとオブジェのような、インスタレーション的な感じに映るのですが、それが20年経つと、こういう緑に囲まれた有機的な空間（図5）になりました。

デッキから降りると石のテラスが



図4 鉄のパーゴラ(施工中) 2011.7.9



図5 鉄のパーゴラ 2021.5.30

あり、狭い空間ですが回遊式になっています。このパーゴラには屋根がかかっていて目隠しの板が随所についています。ですから室内からの景色も、この鉄板によつて隠したいところだけ隠しています。隣家の窓を隠すという機能性を帯びたデザインになっています。

通常こういうものはデザイン重視と思われがちですが、デザインというのは、機能が先だと思つています。機能が先にあるからこそ、それに見合つたデザインを考えていくのであって、デザインありきということはまずないだろなと思つています。

ここで、ぜひお話ししたいストーリーがあります。つくった当時、小学校低学年と幼稚園のお子さんが2人いましたが、僕はどちらかという

と、大人が楽しむ庭というか、狭い空間にいかに人が入れるかということをコンセプトとしてつくりました。お施主さんは、四角い鉄のパーゴラが2つあるデザインに、最初はびっくりしたらしいのですが、琴線に触れたと言つていただきました。要するに、何ができるかわからないけれど、何か自分の中で「ざわつ」と思つていただくことです。そのように言つていただくことは提案する側にとつて一番嬉しいことで、何かわからないものを、いいなど感じてもらえるというのは本当にはまずないだろなと思つています。

さらにその後ですが、お子さんたちが中学生ぐらいだった頃、朝起きたら、まず真っ先にこの庭に出ていき、歯磨きをするというのです。夏場には、日陰ができる午前中は右のパーゴラのベンチで読書して、光が変わる午後になると左のパーゴラのデッキで寝転びながら漫画や本を読んだりする。子どもたちの生活空間が部屋の中だけではなく、外にまで広がっていると話してくれました。その先のストーリーもあります。

下の娘さんが、中学生になつて生徒会の会長に立候補した時に、「学校に緑を増やしたい」を公約に挙げたと聞きました。その理由は、「この庭に

いると緑が自分を癒してくれる。学校にもこういう空間が欲しい」ということでした。

一方、大学生になつたお兄さんは、「この庭があつたからこの大学に入れました」と言つてくれたのです。なぜかというと、「本はそんなに好きじやなかつたけれど、庭のベンチで本を読むのが好きになつてから、国語の授業が聞けるようになつた」とか。

その話を聞いて、僕はそこまでのストーリーは考えていなかつたのですが、庭というのは住む人たちの生活や人生まで変えていく力があるのだと思つし、感動しました。そこまで住む人のストーリーを考え、想像してつくつしていくようにデザインを持つていかなければいけないのだと改めて感じさせられた庭です。

### 錆鉄のパーゴラ（図6・7）

これは2008（平成20）年に、名古屋市につくつた錆鉄のパーゴラです。ここは道路に面していますので、通りすがりの人が触つて汚れたというクレームがお施主さんにきてはいけないなということで、本来は本当の錆が良かつたのですが、錆に見立てて錆塗装とした作品です。

大きな鉄板で大人の目線を隠しています。当時、施主さんの2人の娘



図6 鎌塗装のパーゴラ 2013.5.22

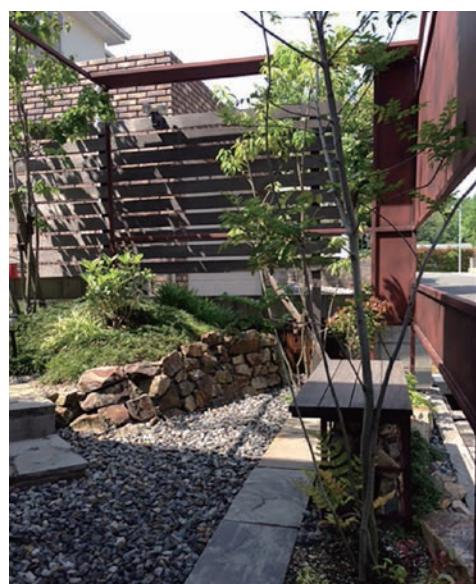


図7 鎌塗装のパーゴラ 2013.5.22

### 石積の門柱（図8）

さんがまだ小学校に入つたばかりで近所の子が遊びに来っていました。子どもたちは玄関から入らず庭から入つてくるので、道路に面していて危ないということで、子どもの目線だけは空けておいてあげようとスリットを設けています。

実際に見ると、スリットの間から見える景色も意外と面白くて、用途のために空けたのですが、庭の効果としても奥行きを感じられ、通りかかる人がちらつと見ても面白く、中にはあるのだろうと想像ができるような庭になっています。

敷地内にあるベンチは、近所の子どもが遊びに来ると、ここで待ち合わせをしながらゲームをしているそうです。子どもたちの待合です。コンセプチュアルで面白い庭でした。

この庭は昔ながらのコンクリート造の古いお宅でモミジのある和風の庭をリフォームしました。奥様の趣味で主庭はバラの庭に変えましたが、シンボリックなものをということで、門柱に石を積むことにしました。高さは約1・6mで、僕は技術不足で、ステンレスを溶接して枠をつくり、それに石を収納していく方法で石を積みました。

石積の良さは角にあると思うのですが、この4ヶ所の角石を選ぶこと自体すごい労力がかかるので、あえて角を消すという意味でも、コストダウンに繋がったと思います。正直言って、我流というか、本流ではないことを行つてるので、これをお勧めはしないです。石積はデザイン

この庭は昔ながらのコンクリート造の古いお宅でモミジのある和風の庭をリフォームしました。奥様の趣味で主庭はバラの庭に変えましたが、シンボリックなものをということで、門柱に石を積むことにしました。高さは約1・6mで、僕は技術不足で、ステンレスを溶接して枠をつくり、それに石を収納していく方法で石を積みました。

石積の良さは角にあると思うのですが、この4ヶ所の角石を選ぶこと自体すごい労力がかかるので、あえて角を消すという意味でも、コストダウンに繋がったと思います。正直言って、我流というか、本流ではないことを行つてるので、これをお勧めはしないです。石積はデザイン



図8 石積の門柱 2018.4.26

だけではなく、強度や安心感を与えないといけないと思っているので、このようなデザインにしました。

このデザインのヒントになったのは、実は静岡県伊豆の国市の垂山反射炉です。国指定史跡であり、「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録されています。反射炉に補強がしてあり、それが鎌びた鉄で格子状に組まれています。それを見たときに、補強しなくてはいけないのだとすると、最初から補強をデザインにしてしまえば、安心なんだと思つたのがヒントとなりこのデザインになりました。

それが今は愛知県というと石積の方が有名で、石を組んだり、積むことによってそれを一つの何かに見立てて、庭のアイテムとして使うことが結構盛んに行われています。

昔から名古屋には、三河仏壇に見られるように端材を利用して細工などを施し付加価値を付けて新たなものをつくり上げる文化があるので、それに近いようなことが石材にも言えるのではないかと思っています。

例えば、幡豆の方に鹿川という碎石の土場がありますが、その四角い碎石を加工して積んでいく技術が

と思うようにできていますので、それが今も脈々と流れています、植治以降、そのような系統の庭が今も続いているのだと思います。

愛知県は石の産地で御影石も採れる地域です。近隣の岐阜県には恵那石など山石系統もあります。三重県には菰野石、伊勢の桃取石、静岡県の天竜青石など色石も近いところにあります。そのように石には恵まれたところです。

### 見立てとモダニズム庭園

明治から昭和にかけての庭は、より自然の環境に近い野や川の流れとか、そういうものを持ち込んでいました。日本人のDNAはコケや川のせせらぎとかそういうものをいいな

若い人たちがつくるモダン庭園にはよく使われています。

本来だつたら碎石は石積の裏込め材や護岸工事に使われているような素材でしたが、一つずつ手を加えて積むという付加価値をつけることによつて、お金をいただける技術にしていると僕は思っています。

### 高温多湿な愛知の風土と植栽

愛知県は大変暑く、東北とは比べられないぐらい過酷な夏を迎えます。山採りの木を植えています。

僕が始めた当時は、仕立て物の時

代で、マキや台杉が主流でした。その頃、僕も雑木に憧れていて、山採りの柔らかい樹形のものを使ってみたいと思っていて、刈谷市の土壤や風土も考えずに植えていました。結局、枯らしてしまいました。

そのことをよくわかっているのが愛知県の植木生産者の方で、何年も前から苗や幼木から山採りに見立てるよう育てて、販売しています。僕もその考え方賛同しています。最近は山採りの樹木はほぼ使わず、植木屋さんが幼木から丹精込めて育てた株立ちの樹木を使っています。

## 愛知県の庭園と建築

愛知県で有名なのは名古屋城。

守閣は戦災で焼失し、現在はコンクリートにより復元されています。この石垣を維持するためにはある程度の重みとしてコンクリート製であつても天守が必要です。現在、名古屋市は木造で復元しようと動いています。

国指定名勝二之丸庭園は近年発掘され、江戸時代の絵図のままに残されていたことがわかりました。現在、修復工事が行われており、その様子が見られるので、面白い状況です。

織田有樂斎の茶室「如庵」は犬山にまだ存在しています。

近代数寄屋の堀口捨己がつくった建築「料亭・八勝館」は重要文化財になっています。一般の人でも料亭の客として入つてもらえば庭園が見られます。

「料亭か茂免」の庭園は7代目小川治兵衛（植治）の作庭です。植治の庭は名古屋では珍しく、唯一残されている庭園だと思います。ここはランチからでも楽しめますので、植治の庭を見たい方には是非お勧めです。豊田市美術館は谷口吉生設計であります。スケールの大きい建築として存

たランドスケープもすぐ素敵です。

### まとめ

「愛知の庭を知ること 自分好みの庭を知ること」をテーマとしてお話ししましたが、自分の好みばかりを売つていくというのもよくないと

思っています。重要なのは施主との相互関係で、押し付けるのではなく、自分が持つているものをいかに引き出してもうかということも大事だ



受講感想  
清水 哲也

本年度より技術委員長に就任し、本講座を企画することとなりました。

対面式で行わ

れていたこの講座はコロナ禍で確立された「Zoo形式」で大きく変わりました。地方の会員が

参加しやすくなつたことです。その結果、全国の会員の作庭写真を紹介して

いたぐことによって、その考え方には地方色が大きく関わっていることも知ることとなりました。

「庭に向かう私の姿勢」をテーマに

第1回は愛知県の高見紀雄氏を講師にお願いいたしました。高温多湿と

いう条件下の植栽材料の選別は経験に基づいた徹底したものでした。

「鉄」を庭の材料として紹介してい

ただいた作品にはとても興味深いものがあり、門構え、仕切り、目隠しなどの可能性は無限であり、斬新な

デザインは受講生には衝撃的だった

と思います。

今回、講師の方々には自分の住んで

いる地域を紹介していただきこともお願いしました。何故この庭をつくったのか？何故そう思ったのか？を知ること

とで庭づくりの本質に近づけると考えるからです。

（愛知県支部長）

※写真は全て筆者撮影

ター・ウォーカーです。建築と相まつ

(一社)日本造園組合連合会(造園連)の創立50周年を記念して、龍居竹之介名誉会長が寄稿した祝辞を造園連のご了承をいただき転載します。

## 上原敬二先生と造園連半世紀を祝う

龍居  
竹之介

上原敬二先生！お喜びください。



龍居竹之介名誉会長 近影

先生が日本の造園界の結束と地位向上を推進する新原動力として応援された造園連こと一般社団法人日本造園組合連合会が、着実な業績を重ねて歩み続けられた結果、令和5年の今年、創立50周年を迎える快挙を果たされましたよ。

先生は造園人も腰を据えて物事を学ぶ大切さ、視野の広いものの見方の必要性など、生来の主張を造園連でもめざすべく造園アカデミーなる学びの場もお生み下さいましたね。代々のリーダーがこの教えを守り、老若を問わず会員たちに学びの大切さを伝え続けられたことも半世紀の

大成果だと存じています。先生、本当にありがとうございました。しかし、私が最近不安に感じているのは、国全体、社会全体が、先生はじめ私たち造園関係者が大切な宝物と考えてきた「緑の力」を無神経に軽視する動きをチラつかせていることに対してです。そしてそれは緑に縁の深い農学、林学などの学問の存在を筆頭に、現場造園社会全体まで疎外している感じなのです。

人で充満する都市は再開発の名目で緑ごと宅地を高層住宅に変貌させるやら、人々の憩いの場であるべき静寂な公園は、経済活性化の看板のもとイベント優先の広場拡充で緑を中心には考えなくなつて行きます。

先生の恩師・本多静六先生のご苦労の作であり、都市公園の草分けの日比谷公園も、その動きの中でイベント会場色を強調した姿へ改造がきまつたとか。また先生ご自身が研究を重ねられ育てら

れた明治神宮外苑のあの美しいイチヨウ並木を中心とした都心の比類なき緑の景観美の効果も、再開発の影響で失われるのはと、都民に案じられています。

中国の「大學」という古い本に「修身齊家治國平天下(天下を治めるにはまず自身の身を修め次に家庭を平和に、次に国を治め、次に天下を治める順序に従うべし)」とあります

が、私はこれを「人の暮らし周辺の緑をまず大事にし、順にひろげ国全體の緑を大事にすれば国は災害も受けず平和な世となる」といいかえていますが、先生いかがですか。

その意味で先生から造園アカデミーを通じ物の考え方や、造園の力で緑を活かす大切さを教えられた、次々の世代に伝えられてきた半世紀にわたる造園連会員の皆さんの英智が、来るべき60周年に向けて發揮されんことを、そして腰を据えてのご発展を、心からお祈りいたします。

最後に改めましてもう一度造園連さん創立50周年、本当におめでとうございます。永遠なれ造園連！

寄稿「創立50周年記念誌—伝統の継承と創造—技と人をつないで～庭～未来へ～」  
2023年5月25日発行

コラム 静岡県熱海市熱海上多賀芸術村での伝統庭園技塾

三宅秀俊

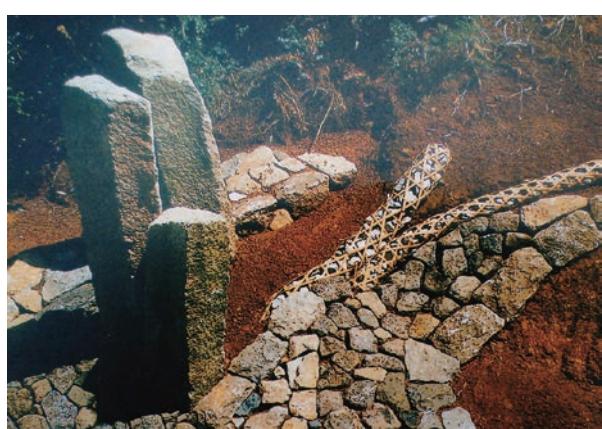


前号の巻頭言でお話ししたように、国

営武藏丘陵森林公園での伝統庭園技塾は充実した内容

でしたが、唯一残念だったのは、各班でつくった実習課題を講師講評後、全て壊してしまうことでした。受講生も私も複雑な心境でした。

そうした思いを解決したのが、1987(昭和62)年から1990(平成2)年に計5回開催された熱海市熱海上多賀芸術村を会場とする伝統庭園技塾でした。ここでは研修成果



柔らかな曲線の石貼りと力強い六方石による研修成果



雑誌『庭』73号に掲載された自作の石積

のほとんどを残すことができました。熱海では充実した日中の実習の他、夜の講座もあり、鈴木直衛、河西力の両講師による連日連夜の研修が続きました。さらに、夜の講座の後に話をしたい人は集まれと声がかかり、講師と全国各地からの受講生との遠慮のない話で盛り上がりました。両講師の物凄いパワーで、時間を忘れていろいろな話をして、大変楽しかったことを思い出します。

この研修に参加するまで石は固いものと思っていましたが、石でも柔らかな表現ができるのだと学びました。それから岡山に戻つてつくつた作品が雑誌『庭』73号に掲載されました。

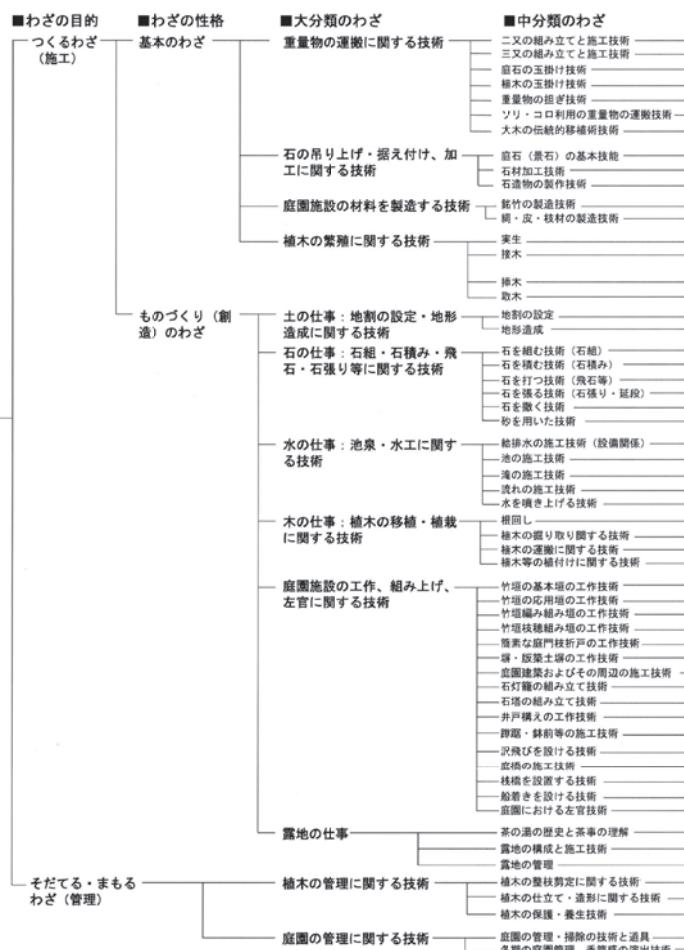
報告:『ランドスケープ研究』・特集  
「日本庭園の継承と発展」に寄稿

表題の冊子は、日本造園学会が発行する学会誌の特集号です。内容は、昨今の日本庭園をめぐる国内外の動向と課題をふまえ、①日本庭園の継承と発展に関する総論、②日本庭園の「こころ」の世界、③日本庭園の「わざ」の世界、④日本庭園の展開という4部構成となっています。

「こころ」と「わざ」に関しては、2021年度より日本造園学会に設置された『日本庭園の「こころ」と「わざ」』②と③の日本庭園のうちの二つを紹介する。

「」に聞いて、本研究会委員会（以下「推進委員会」）における2年間の調査研究の成果をベースとしたものです。推進委員会では、「二二一」部会

「わざ」部会に分かれ調査研究を進めています。「わざ」部会は、当協会をはじめ、日本造園組合連合会、日本造園建設業協会、京都府造園協同組合など日本庭園の「わざ」に関わりの深い団体が参加しており、初年度には日本庭園の「わざ」を体系化（下図）しました。2年目からは、各団体で担当を決め、分類された「わざ」の詳細情報を収集し「わざシート」としてまとめています。



### 「日本庭園のわざ」の体系図(部分)

常務理事、細野達哉氏（オブザーバー参加）が「水の仕事」を担当して調査研究を進めています。「水の仕事」とは、水源から流末に至るまでに用いられる「わざ」をさし、形状としては大きく滝、流れ、池に分けられ、護岸や底部の構造、石組、石積などによる修景や材料など、多様な観点からの分類整理を試みています。

当協会は、今回発行された特集号に、担当の「水の仕事」と関連する話題として、「東京都立の文化財庭園に見る池泉のわざ」と題して寄稿し

（文責・小沼康子）  
図の出典：『ランドスケープ研究』特集  
「日本庭園の継承と発展」第87巻第2  
号、日本造園学会、2023.7.31

ました。中でも、近年、保存・管理において重要度の高い「水源」と「護岸」にしぼつて現状を概観し、課題が多いことを述べました。

東京都支部主催

## 第2回庭園見学バスツアー

2023(令和5)年7月16日(日)

鈴木 康幸



佐藤邸「しかくのにわ」筆者作庭 竣工時 2021.5.27 筆者撮影



「上尾の庭」平井孝幸氏作庭 竣工時 2023.4月末 平井孝幸氏撮影

次は佐藤邸「しかくのにわ」。佐藤邸は旧本田家住宅から東に2軒先のところにある旧家で、私の叔母の家でもある。3年前に家を建て替えた際、作庭の依頼があり、コロナ禍であつたが時間をかけ丁寧に施工した。基本的にその現場にある使える材料（石材、植木など）は全て用い、一

昨年11月に続く庭園バスツアーの第2弾を開催した。私が作庭した国立市の庭「しかくのにわ」と弊社で管理している旧本田家住宅、再開発が計画され、話題となっている日比谷公園、そして平井孝幸氏作庭の上尾の庭を巡ることとし

た。当初は本部との共催を交渉したがかなわず、単独開催となつた。まずは日比谷公園から。当日は、気温が35度を超えて、直射日光が肌に刺さるほどの猛暑となつてしまつたが、高橋康夫会長の案内で約1時間、園内を歩き、時々立ち止まり、お話を聞き、また歩きと園内の隅々までいろいろなエピソードを交えながらお話ししていただいた。午前10時からだったので、日陰も多く、暑さにも耐えられた。

東京都が進める日比谷公園の再開発は、初代会長本多静六氏の考え、歴史的価値などをすべて無視したデ

ザインで悲しい限りである。近世から現代の遺産として後世にも残して欲しいと思う。

次は旧本田家住宅へ。本田家は私の祖父からの御得意様であり、数年前に甲州街道に面した旧家屋を土地と共に国立市に寄贈され、現在国立市が管理している。旧家屋を調査した結果、江戸時代中頃の建物で東京都に現存している木造住宅では一番古いことが分かり、文化財として解体、復元されることとなつていて。たまたま弊社（株）植繁は公共事業もしており、引き続き国立市の下、管理に携わっている。市の職員さん

が丁寧に解説してくれました。さり、今後の作業にも励みになつた。

次は佐藤邸「しかくのにわ」。佐藤邸は旧本田家住宅から東に2軒先のところにある旧家で、私の叔母の家でもある。3年前に家を建て替えた際、作庭の方々に感謝すると共に、今後もどうぞ日本庭園協会東京都支部にご協力いただけますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

(東京都支部長)

部、新しい材料を使い施工した。三つのしかくをつくり、既存の雪見灯籠の笠をひっくり返して少し彫つて水盤とし、ポイントに据えてみた。落ち着いた渋みのある庭ができたと思う。佐藤邸のご厚意でエアコンの効いた部屋で昼食をとり、バスに乗り、一路、埼玉県上尾市へ。

最後は平井孝幸氏作庭の「上尾の庭」。昨年、見学した時には、まだ園路も完成しておらず、流れの線形も出来ていなかつたが、完成して数ヶ月が経つた庭を観ると鳥肌が立つ思ひがした。平井氏の庭は幾度か見学させていただいたことがあつたが、この庭は平井氏の集大成だと思つた。低木、下草を大胆に省略した風景、棚田を具現化した小端積みの風景、移植せず残したただ一本のオオシマザクラ、満開の時季に観に行きたかつたと思うと共に「やられたなあ感」が湧き上がってきた。まだまだ自分は先輩方の域には達していない、「一念通天」で行こうと心に誓つた。

最後に、暑い中、ご参加下さつた方々に感謝すると共に、今後もどうぞ日本庭園協会東京都支部にご協力いただけますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

## 本部たより

国際活動委員会

トルコ共和国ガズィアンテープ市  
代表団との面会

2023(令和5)年8月8日(火)

細野  
達哉

東京都渋谷区にある駐日トルコ共

和国大使館にて、日本庭園協会とトルコ共和国ガズィアンテープ市の代表団が面会を行なつた。

市の代表団からは、エルデム・ギュゼルベイ副市長ほか、都市インフラなどの局長ら数名が出席。当協会からは高橋康夫、細野達哉、大平敦子(敬称略)の3名が出席した。

本件は、駐日トルコ大使館を介して、当市代表団から当協会へ、その訪日に合わせた面会の要望があり、実施されたものである。

ガズィアンテープ市では、今年2月に起きたトルコ・シリア地震の復興ならびに街の歴史を記念した市民公園の整備計画があり、その敷地内に日本とトルコの親善を象徴した1000m<sup>2</sup>ほどの日本庭園の築造を検討している。今回の面会は、その計画の説明と協力の打診を主旨として行われたものである。

高橋会長は、発言の冒頭にトルコ

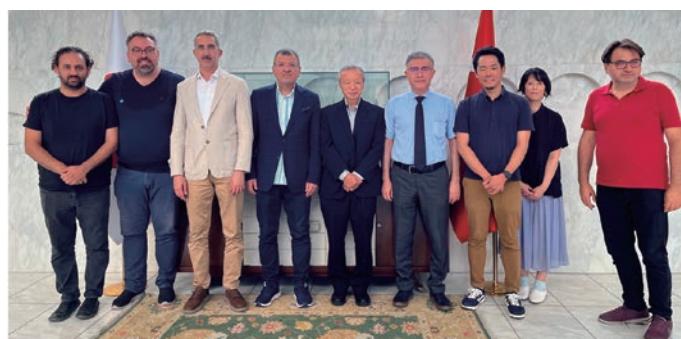
が取り組んだ東日本大震災復興記念庭園に関する資料を代表団に渡して、その解説を通して日本の庭園に関する概説を伝えた。

その後、代表団からは日本の庭園文化と造園工事に関して、当協会から公園計画の構想に関するお互いに質疑を交わし、およそ1時間の面会を終えた。

1890(明治23)年に起きたトルトゥールル号の悲劇をきっかけと



面会の様子。ガズィアンテープ市代表団 奥・2人目から(敬称略)セルダル・ムラット・ギュルセル(保全維持課長・博物館等担当)、エルデム・ギュゼルベイ(市長代理)、ヒュセイン・ソンメズレル(上下水道局長)、オメル・セルチュック・バズ(ヤルン建築共同代表)、ジャフェル・ユルマズ(消防課長) 撮影筆者



面会を行なったガズィアンテープ市代表団との記念写真  
(細野カメラにて大使館職員撮影)

での震災被災者に対する哀悼と復興への激励の言葉を述べてその苦難に共感する姿勢を示し、続けて当協会

が取り組んだ東日本大震災復興記念庭園に関する資料を代表団に渡して、その解説を通して日本の庭園に関する概説を伝えた。

その後、代表団からは日本の庭園文化と造園工事に関して、当協会から公園計画の構想に関するお互いに質疑を交わし、およそ1時間の面会を終えた。

当協会としては引き続きガズィアンテープ市と交流を続け、計画の具体化に向けた助言と、協力体制の模索を行なつていく意向である。

(国際活動委員会事務局長)

## 技術委員会

●伝統庭園技塾

「掛川市松ヶ岡庭園修復基礎研修会」

9月2日(土)~4日(月)、清水哲也技術委員長を塾長として開催されました。3日間で静岡県支部会員を中心とした延110名を超える参加者が集い、事故もなく有意義な研修となりました。

研修では、1日目は庭園の概要を学び、2日目と3日目は主に庭園内の樹木の手入れを行いました。また、今後の整備方針策定の基礎資料とするため飛石や燈籠など石材・石造物の簡易調査も行いました。

研修内容の詳細は次号に掲載予定。

### ●第14回庭園技術連続基礎講座

5月から9月の月末日曜日に、オンラインによって全5回の講座を開催しました。第1回・高見紀雄氏、第2回・伊久美和秀氏、第3回・丸山道隆氏、第4回・山田祐司氏、第5回・小泉隆一氏にご講演いただきました。

内容は随時本誌に掲載予定。

## 財務委員会

●会費納入のお願い

今年度の会費納入がまだお済みでない方は、速やかな納入をお願いいたします。

